

立命館大学

全学共通ライティング・サポート構想の具体化

— ライティング・サポート室の設立経緯を中心に —

大 田 桂一郎

要 旨

本稿は、2021年4月から設置された立命館大学のライティングを対象とした学修支援窓口「ライティング・サポート室」の設置経緯をまとめるものである。過去に設置されたライティング・サポート・デスクの取り組みから教学政策である「協創施策（後半期）」、2019年度全学協議会での議論、そして「全学的ライティング・サポート具体化WG」を踏まえ、どのようにライティング・サポート構想が再燃し、新しい全学共通ライティング・サポート構想を推進したのか、担当した専任職員の立場からその記録を編纂することを目的としている。

キーワード

ライティング、全学協議会、協創施策、全学的ライティング・サポート具体化WG、ライティング・サポート室

はじめに

近年、多くの大学において、学生のレポート執筆を支援するためライティング・センターが設立されている。本学の所在地である京都、滋賀や大阪近辺においても、関西大学ライティングラボ¹⁾、関西学院大学ライティングセンター²⁾、龍谷大学ライティングサポートセンター³⁾などが、本学の姉妹大学である立命館アジア太平洋大学においてもライティングセンター⁴⁾が展開されている。一方で立命館大学においては2000年代後半期より、ライティング教学の充実を図られている（表1）。

表 1 立命館大学における「ライティング・サポート」の到達点

年度	内容
2009	教育開発推進機構接続教育支援センターを主幹とする「日本語リテラシー共同プログラム開発検討ワーキング」および同ワーキングの小委員会において、全学共通で標準的に保証すべき日本語教育の具体的な内容が検討された。
2010	「読む力」「書く力」「考える力」を一体的に育てる科目として「日本語の技法」を開発し、学部横断型授業としてパイロット的に3クラス開講された。
2012～2015	5学部8クラスで実施し、毎年約400～500名が受講した。図書館に「ライティング・サポート・デスク」が開設された。
2015～2020	学部が主体となって独自に取り組むために、教育開発推進機構が各学部の支援（教材開発や指導方法）を行う体制となった。各学部において、卒業論文の必須化に伴い学部毎に初年次科目「基礎演習」などを開講している。

2008年度に教育開発推進機構が発足し、その中の1組織として接続教育支援センターが設置された。接続教育センターを主幹とし、2009年度に「日本語リテラシー共同プログラム開発検討ワーキング」および同ワーキングの小委員会において、全学共通で標準的に保証すべき日本語教育の具体的な内容が検討された。経緯についての詳細は本紀要の特集前稿を参照されたい。

特筆すべきは、2012～2015年度、立命館大学の図書館内に設置されているラーニング・コモンズ「びあら」に「ライティング・サポート・デスク」が開設されたことである。この取り組みは「ライティング・サポート室」の前身施策にあたる。その成果と課題については当時チューターを担っていた中島ら(2016)にて詳細に述べられている。「ライティング・サポート・デスク」の成果としては、デスクを訪れた学生は「書く力」「読む力」の成長実感があったこと、チューターとして業務に携わった大学院生も学生に「気づき」を与えようとする中で自身も「気づき」を得、より深く学んでいた点である。一方、問題点として、5つ挙げられている。①チューターの確保と養成、②デスク認知度、③ニーズの不一致、④サポートを担う院生の負担、⑤チューター間の仕事量に大きな差である。

2015年度に教育開発推進機構の目的が見直され、ライティング・サポート・デスクを担当していた接続教育センターが教育開発支援センターと統合、教育・学修支援センターが立ち上がった⁵⁾。それに伴い施策転換の1つとして、ライティング・サポート・デスクは終了し、ライティング教学は、学部が主体となって独自に取り組むこととなった。支援の在り方も、統合された教育・学修支援センターが各学部の教材開発や指導方法を支えるという体制となった。当該体制は、2020年度まで継続され、現在も特筆すべき取り組みを行っている学部・研究科が存在する⁶⁾。

ここまでは立命館大学における「ライティング・サポート」の到達点をたどってきた。本稿の目的は次の1点である。それは、2015年度以降学部が主体となってライティング教学に取り組む最中、全学共通ライティング・サポートの議論が再燃し、新たなライティング支援、学修支援窓口「ライティング・サポート室」が立ち上がるまでの経緯を編纂し、発信することである。

本稿は次のように構成される。まず第1節では、全学共通ライティング・サポートの議論が再燃する過程である、2019年度の全学協議会と立命館大学の中期ビジョン R2020 と R2030 を架橋する施策（協創施策）についての経過をたどる。この節は、どのような契機で全学共通ライティング・サポートの議論が再燃したのかという点にあたる。次に第2節では、全学的ライティン

グ・サポートWGの設置を中心にどのような考えのもと、サポートを開始したか、どのような支援層を想定したかも含め述べる。第3節では「ライティング・サポート室」の設置にあたってを、第4節は今後に向けて方向性を示唆する。

1 協創施策推進本部会議と全学協議会

1.1 協創施策推進本部会議の設置と議論

立命館大学では、2020年度までの中期ビジョンであるR2020から2030年度までの中期ビジョンであるR2030へ架橋するための施策を「協創施策」と位置づけた。協創施策の検討と具体化については、教学部・国際部・学生部の3部が部を超えて連携することが必要不可欠であり、具体化の推進においても、正課・課外を通じた学生の学びと成長、グローバル化の推進、多様な学生に対する学修・学生支援など、横断的課題を効果的に推進するため、同3部による連携の下で行っていくことが必要であるとされた。そして、3部の執行部等からなる「協創施策推進本部」が設置された。

「全学共通ライティング・サポート推進」については、協創施策の1つとして位置づけられ、協創施策後半期（2021年以降に実施する施策）として、2019年4月3日の協創施策推進本部会議で提起がなされた。提起にあたっての具体的な理由は次の通りである。1つ目は、2018年度全学協議会⁷⁾での議論を踏まえた、卒業論文・卒業研究執筆の土台となる文章作成能力を育て高めるための、「全学的ライティング・サポート」のあり方についての検討である。全学協議会は、学生と大学が協議を行う立命館の特色とも言える取り組みである。2018年度の学生からの論点として、大学での学び、特に授業外学習時間が相対的に少ないという実態を受け、学生の知的好奇心を喚起し、興味関心を高める授業の実践や教育の質向上や学生の満足度、成長実感に関して客観的な評価指標を設定・検証をすることも求められていた。2つ目は、学生部が取り組みを推進しているSSP（Student Success Program）⁸⁾へ、レポート執筆等の支援ニーズが多く寄せられているという実態である。SSPは、スチューデントスキルの支援を主とし、①自らの強み・弱みを理解する自己理解力、②スケジュール管理やタスク管理などの自己管理能力、③優先順位をつけ、選択する自己決定力を養うことを目指し支援を行っている。2018年度においては、各学部が独自でライティング教学を推進してはいたものの、学生主観では、統一かつ一元的なアカデミックスキルの相談窓口がなく、SSPへレポート執筆や卒業論文の構成などのアカデミックな相談内容が寄せられている状態であった。以上を踏まえて、「協創施策推進本部」において、「全学共通ライティング・サポート推進」の議論を始めたわけである。

1.2 2019年度全学協議会における学生からの問題提起

前項で記載の通り、立命館大学には全学協議会がある。この節では「全学共通ライティング・サポート推進」について、契機となった2019年度全学協議会について触れておきたい。

2018年度に開催された全学協議会確認事項を踏まえ、2019年度全学協議会でも引き続き「正課における教育の質向上」や「留学生支援を含む国際化、包括的学生支援とダイバーシティ&インクルージョンの推進」が争点となっていた。大学から学生への説明では、先に列挙した学生か

らの論点提起への回答とともに、協創施策の進捗状況についても言及された。特に、ライティング・サポートに関わる協創施策後半期（2021年以降）についての進捗状況は『学園通信 2019（2019.6.21）』の中で次のように述べられている。

卒業論文・卒業研究執筆の土台となる文章作成能力を育て高めるための全学的な日英両言語でのライティングサポートのあり方（オンラインあるいは対面の正課授業、共通教材の作成、正課外のチュートリアルなど）について、検討を行います。

立命館大学では、「教学ガイドライン」を定め、学位授与方針および教育目標を踏まえた、卒業時の質保証を行う手立て（卒業論文、卒業研究、卒業制作等を含む）の必修化もしくはそれに代わる検証可能なシステムを明確にするとともに、節目毎の成果を検証する科目を明確にし、到達度を検証する（必修科目の明確化等）としている。2022年12月現在では16学部の内、15学部が原則卒業論文が必修化されている。卒業論文必修化や卒業時の質保証の波を受け、段階的な文章作成能力の支援・サポートについてが論点となり、上述のように、協創施策後半期（2021年以降）の施策としてライティング・サポートに関する支援を実施することを学生に約束したのである。

2 全学的ライティングサポート具体化 WG と支援レベル層

2.1 全学的ライティングサポート具体化 WG

『学園通信 2019（2019.6.21）』にて、「全学共通ライティング・サポート推進」を学生へ周知することを受け、2019年6月19日に実施された協創施策推進本部会議において、「全学的ライティング・サポート具体化 WG」を設置することが議決された。同 WG では、全学協議会での意見等を受け、どのように「全学共通ライティング・サポート推進」を行っていくか、集中的に議論を行うこととした。メンバーは、ライティング・サポートを中心的に担う教学部副部長、学生部（SSP（Student Success Program））へも議論参画をお願いし、下表の点を検討事項として進めることが確認された。

表2 「全学的ライティング・サポート具体化 WG」での検討事項

No	検討事項
1	全学共通の「ライティング・サポート」講義（学部・大学院）の設計
2	各学部で現在行われているライティング・サポートとの代替あるいは補完関係の整理
3	ライティング・サポート講義の課題に対してコメントを行うチューターの確保と育成
4	サポートデスクにおいて対面で相談に応じるチューターの確保と育成
5	カテゴリー別の方針（JJ: 日本語の文章を日本語で指導、JE、EJ、EE）
6	2021年度開講・開設に向けた作業工程の具体化

「全学的ライティングサポート具体化 WG」で実施された詳細かつメタ的な議論は割愛するものの、2019年7月29日、2020年1月24日、2020年11月11日の計3回、集中的に実施された。

WGを進める中で、ライティング・サポートにおいて特質すべき取り組みを行っている学部へのヒアリングを実施した。ヒアリング結果を踏まえて、最終的には、①学部として全学的なライティング・サポートの在り方を提起する、②中長期的にはライティング・サポートに関わる科目を設計する、③支援のレベル層を「ライティング導入段階」にフォーカスすることとした。

2.2 確認されてきたニーズ

ライティング・サポートに関わるニーズは、特質すべき取り組みを行っている学部へのヒアリングや各学部が毎年度自己点検評価書として作成している「教学総括・次年度計画概要」から次の点が確認された。1つ目は、レポートや論文を「書く」こと以前に、文献が「読む」、与えられた情報から「問いを立てる」「必要な資料を適切に収集する」「図書館で図書を探す適切な方法」など、アカデミック・ライティングを行う上での「導入段階」の支援ニーズである。2つ目は、ライティング支援には、学部として一定の取り組み成果は上がっているものの、個別に支援を行うことや教材を作成していくことの人的リソース（教員体制・職員体制）の限界である。3つ目は、ライティング個別支援（学部独自のサポートデスクやTAによる添削支援）などは継続して実施しているものの、学生の利用率が低いことである。

これらのニーズは、冒頭述べた前身のライティング・サポート・デスクで確認されたものとは別のニーズであった。つまり、各学部が専門性を踏まえたライティング支援を行うにあたり、全ての専門分野（学士課程）に共通となる土台部分（文章を書く上で必要なリーディング、一文一義で書く、構造的な文章の理解、問いを立てることなど）である。全学へ提起するにあたり、「全学的ライティングサポート具体化WG」では、その支援段階・レベルを図1として整理し、2020年11月30日の教学委員会へ提起を行い、各学部の意見を求めた。

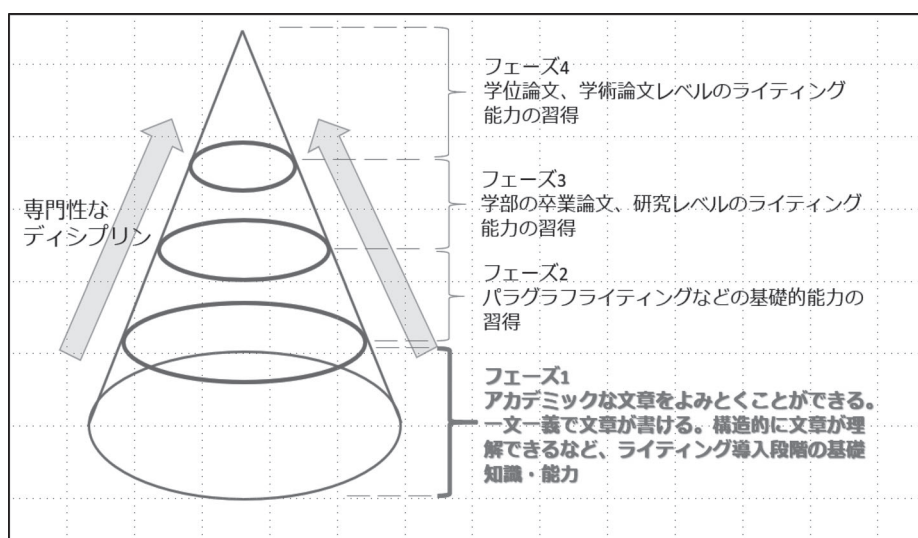


図1 ライティング・サポート 支援レベル層

2.3 各学部の専門性との関係性

各学部からは貴重な意見を頂戴することができた。学内情報のため、ここでは紹介することはできないが、主には学部の専門性や学内の他機関との連携、支援層と支援内容の更なる具体化、リメディアル教育との差別化などである。図1の通り、その支援段階・レベルを整理したものの、立命館大学には16学部21研究科（2022年12月現在）と多様な学部があり、それぞれの専門分野がある。当然のことながら、各学部の専門的なディシプリンは、学部の教育目標やカリキュラムポリシーによって規定され、学生はカリキュラムを体系的に進めることによって、ディプロマポリシーに定められた能力を獲得していく。専門的なディシプリンを学んでいく中で、ライティングのレベルが上がっていく構造にあった。そのため、専門分野との関係性を図2の通り整理しなおし、新たな全学共通ライティング・サポートは、この共通となる土台部分について、立命館大学の学生が共有しておくべきリテラシーとして涵養することを目指すとした。途中新型コロナウイルス感染拡大の影響で議論がままならない状態が続いたものの2021年2月15日に教学委員会へ提起の上、政策の実施が決まった。

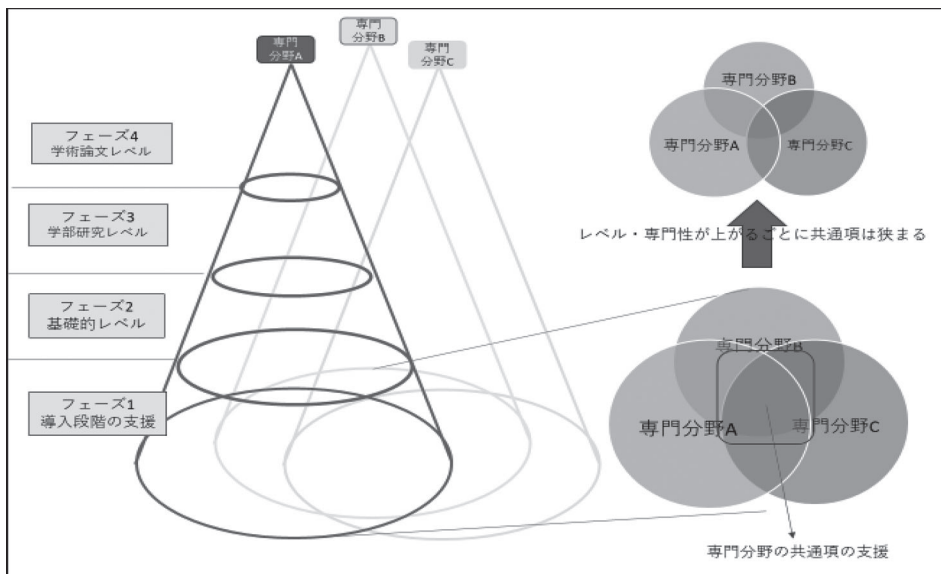


図2 支援レベル層／専門分野との関係性

3 「ライティング・サポート室」の開設にあたって

3.1 学修支援を行う理念・方針

2021年2月15日に教学委員会の「全学共通のライティング・サポート」実施決定を受けて、学修支援窓口である「ライティング・サポート室」の具体化を進めることとなった。2021年4月からのスタートであったため、短期間で①ライティング・サポートを担う専門人材の確保、②支援を行う理念・方針の策定、③チューターの雇用、④運営体制の検討、それら具体化する必要

があった。

特に支援を行う理念・方針については、「全学的ライティング・サポート具体化WG」や教学委員会での議論を踏まえ、「相談学生が自分自身の力でレポートが書けるよう、専門分野や多様性、学生の主体的な考えを尊重し、成長や発見を育む支援を行う」とし、「ライティング・サポート室 学習支援ガイドライン」としてまとめた。下記はガイドラインの一部抜粋である。

立命館大学には、16学部・21研究科が存在し、それぞれ専門分野も多様に存在します。当然のことながら、学術的文章（論文やレポート）の書き方はその専門分野によって規定されている書式、方式、形式が異なります。分野の共通項となる導入段階のライティング・サポートの支援を行い、「自律的な書き手」の育成を目指すのがライティング・サポート室の学生相談・学修支援です。

- ・ライティング・サポート室では、学生の成長と主体的な学びを促す支援を行います。
- ・「自律的な書き手」を育てるという目的に基づき、学生自ら考え、理解を促すための手助けを行います。
- ・「自律的な書き手」を育てるという目的にも基づき、学術的文章の診断、リーディングの相談、問いや論題の立て方などのアカデミックスキルの相談・支援を行います。
- ・学生のバックグラウンドにある学部教学・専門分野を尊重します。

急募であったものの、専門人材を確保することができ、かつ関係教職員に尽力いただき、初代チューター TA として2名の大学院生を迎え入れ（辻俊成氏（文学研究科）、北和樹氏（国際関係研究科））、2021年4月よりスモールスタートにて開室するに至った。

3.2 2021年4月時の開室状況

2021年4月からのスモールスタートは、専門契約職員1名の相談体制とし、スモールスタートを始めることとした。迎え入れた大学院生2名は非常に優秀であったものの、研修なしに相談を受けることは避け、薄井道正教授が担当する教養ゼミナールをファシリテートしてもらいながら、スキルを磨いてもらった。そのため2021年度春学期は、相談枠自体は1日5名上限、週3日間、衣笠キャンパスのみの開室とした。相談時間は他大学の先例を参考に「40分」とし、下記の時間割にて相談受付を開始した。

表3 2021年度発足時の開室状況

時限	3限	4限	5限	6限	7限	8限	9限
曜日	10:45～11:30	11:30～12:15	12:55～13:40	13:40～14:25	14:40～15:25	15:25～16:10	16:20～17:05
月			●	●	●	●	●
火							
水							
木			●	●	●	●	●
金	教養ゼミナール		●	●	●	●	●

※●が相談対応枠。春学期は各枠1予約、時限は理系時限表記。

結果的に 2021 年春学期は 149 名（延べ）の相談学生が訪れた。これは予約受付を実施した予約スロット 225 枠（1 日 5 名×週 3 日×授業開講期間 15 週）の 66.2%が埋まったこととなる。2021 年度秋学期からはびわこ・くさつキャンパス、大阪いばらきキャンパスへの Zoom を用いたオンライン相談を開放し、全キャンパスでの相談受付を開始した。

4 おわりに

本稿は、2015 年度以降学部が主体となってライティング教学に取り組む最中、全学共通ライティング・サポートの議論が再燃し、新たなライティング支援、学修支援窓口「ライティング・サポート室」が立ち上がるまでの経緯を編纂、記録したものである。2021 年 4 月、立命館大学におけるライティング・サポートはリスタートを切った。本稿が公開される 2023 年 3 月には、2 年が経過し、相談学生も着実に増えていることであろう。今後「ライティング・サポート室」の更なる充実には、現在センター内で総括されている課題（学部教学との更なる連携、多言語化、学内の学習支援とよりシームレスな連携）に加え、教職員の理解や専門人材の育成、更にはチューター組織の一層の結束が必要である。また、筆者は本ライティング・サポート構想の立ち上げより担当した専任職員であるが、「ライティング・サポート室」が自走化していくためには、職員の専門力量向上という点も重要な論点である。末筆ながら、今後の「ライティング・サポート室」を発展を願いたい。

謝辞

これまで立命館大学のアカデミックライティング推進に尽力されてきた薄井道正教授が 2022 年 3 月にご退職されました。本稿で紹介した全学共通ライティング・サポート構想にも貴重なご意見を頂きました。また、ライティング・サポート室設置にあたり奔走頂きました、森岡真史教授（国際関係学部／前教学部部长）、吉田誠教授（産業社会学部／前教学部副部长）、仲田晋教授（情報理工学部／前教学部副部长）、ライティング・チューターの皆さんへ多大なる感謝を申し上げます。

注

- 1) <https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>（2022.12.14 最終閲覧）
- 2) https://www.kwansei.ac.jp/education/writing_skill/center/（2022.12.14 最終閲覧）
- 3) <https://www.ryukoku.ac.jp/writingsupport/>（2022.12.14 最終閲覧）
- 4) <https://www.apu.ac.jp/academic/page/content0075.html?c=17>（2022.12.14 最終閲覧）
- 5) ITLNews34 号 <http://www.ritsumei.ac.jp/itl/assets/file/publication/nl/vol34.pdf>（2022.12.14 最終閲覧）
- 6) ITLNews38 号 <https://www.ritsumei.ac.jp/itl/assets/file/publication/nl/vol38.pdf>（2022.12.14 最終閲覧）
- 7) <https://www.ritsumei.ac.jp/features/zengakkyo/>（2022.12.14 最終閲覧）
- 8) <https://www.ritsumei.ac.jp/ssp/>（2022.12.14 最終閲覧）

参考文献

- 中島梓・鹿島萌子「立命館大学におけるライティング・サポート・デスクの理念と実践—チューターの立場から振り返って—」『立命館高等教育研究』16号、2016、pp101-116
- 立命館大学「学園通信 2019」2019年6月21日発刊 (<https://www.ritsumei.ac.jp/features/zengakkyo/assets/file/council/zengakukkyo2019-booklet.pdf> 2022.12.14 最終閲覧)

本稿の執筆に当たり、「協創施策推進本部会議」「教学委員会」の資料等を引用（参考）とした。用いた資料は次の通りである。

【協創施策推進本部会議】

協創施策（後半期計画）における「全学的ライティング・サポート」の具体化検討ワーキングの設置について（2019年6月19日）

【教学委員会】

協創施策の推進体制—協創施策推進本部の設置について（2019年01月07日）

全学共通ライティング・サポート構想の具体化について—意見集約を踏まえて—（2021年2月15日）

【全学的ライティング・サポート具体化検討ワーキング】

第1回全学的ライティング・サポート具体化検討ワーキング資料（2019年7月29日）

第2回全学的ライティング・サポート具体化検討ワーキング資料（2020年1月24日）

第3回全学的ライティング・サポート具体化検討ワーキング資料（2020年11月11日）

**Development of Writing Support Education:
History of the writing support center at Ritsumeikan University**

OTA Keiichiro (Administrator, Office of Academic Affairs Ritsumeikan University)

Abstract

The Writing support center at Ritsumeikan University was established in April 2021. The purpose of this report is to summarize the history of its establishment and discuss the following three points from the standpoint of those in charge of the project: Learning Innovation (2nd term), the discussion at The Plenary Council of the University, and How the Writing Support Initiative was rekindled to promote the brand new writing support initiative.

Keywords

Academic Writing, The Plenary Council of the University, Learning Innovations, Writing Support Working Group, Writing Support Center